S5-02　高次脳機能障害

失語症の保続が軽減し，夫婦の会話に改善がみられた1症例
– 「寝るか」「寝るか」から「寝るか」「寝るべ」の1人称の言語 –

○宍戸 加奈美[1)]，木村 絵梨[2)]

1) 函館稜北病院
2) 北海道こども発達研究センター

【はじめに】
発症から6年以上経過した重度運動性失語症例と認知神経リハビリテーションの失語症訓練を実施後，長年変化のなかった失語症の保続が軽減し，発語内行為に改善がみられた為，報告する．

【症例】
X年に左被殻出血を発症した60代後半の男性．右上下肢に麻痺は残存したが，杖歩行にて移動自立．X＋1年，通所リハビリ利用開始となった．重度運動性失語・失行・注意障害が残存し，特に発話・動作共に運動性保続が強くみられた．標準失語症検査（SLTA）の聴覚的理解は単語レベルから低下，視覚情報の理解は比較的良好．自発話は僅かで稀に単語発話あり．はい/いいえ（発話）や首振り/頷きの返答は保続が強く，信頼性に欠けた．

【病態解釈】
保続について山鳥は「一旦賦活された神経過程が十分に抑制されないために生ずる現象」と述べている（山鳥重, 1987）．本症例は保続の際に修正や抑制ができず，気づきもみられなかった．注意の分配性や転導性に低下はあったが，全般的な注意・連続性は高く，課題への意識も持続可能．解読可能なテーマとレーマを設定し，認知過程の注意を活性化することで保続を制御できれば，はい/いいえ・首振り/頷きの返答が再学習できるのではないかと仮説を立てた．

【訓練】
X＋3年後，１セット4枚の写真（絵カード）で構成されたカードを活用した解読訓練を実施（週1回20分，6か月）．言語発達レベルに準じたカードを選択，徐々に言語変数を変えて，保続を制御し言語機能の再学習を促した．当初は思考時間が短く，発話することに努力し保続が多かった．返答をはい/いいえから首振り/頷きに変更し継続すると，発語内行為に変化がみられ，思考時間が増加．同時に保続が減少した．

【結果・考察】
失語症の保続を意識的に制御し，言語機能の再学習が可能となった．それにより，意識的な返答や自己修正，的確なジェスチャーや短い発話が増加．妻との寝る前の会話が「寝るか」「寝るか」から，発症前の「寝るか」「寝るべ」（北海道弁）に戻った．また妻からの依頼に「わかっています」と返答するなど文脈に沿った対話がみられた．SLTA に変化はなかったが，上記記述は発語行為・発語内行為が改善し，発語媒介行為として夫婦の会話が一部可能になったと推測．本症例にとって保続の制御は，一人称的記述を取り戻す一助となった可能性がある．

【説明と同意】
症例・家族へ説明を行い，同意を得た．